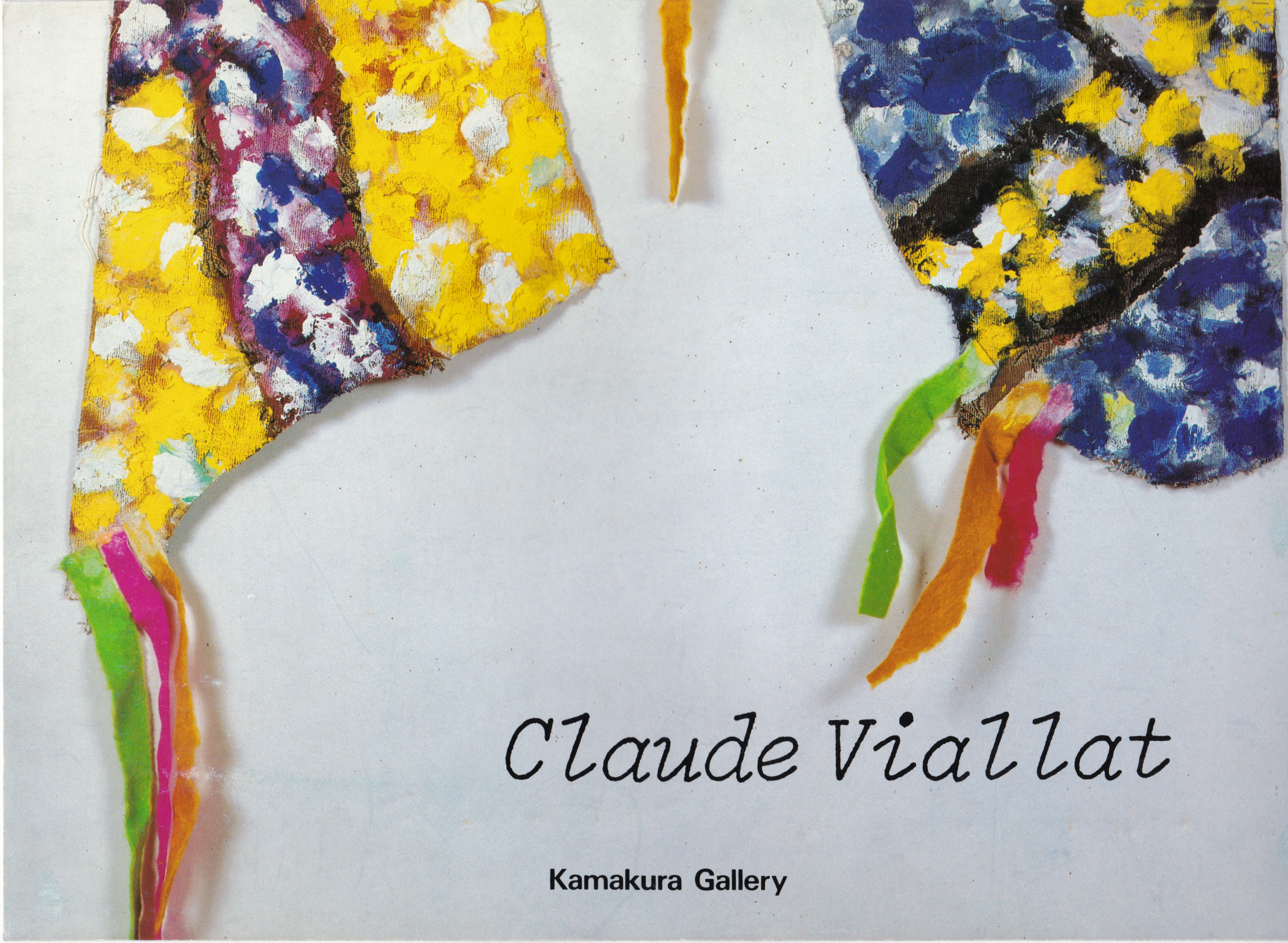


Claude Viallat

Kamakura Gallery

Claude Viallat

クロード・ヴィアラ展

PART I　4月16日－25日
PART II　4月26日－5月4日

クロード・ヴィアラの最近作

東野芳明　YOSHIAKI TŌNO

クロード・ヴィアラを南仏のカリフォルニアといわれる生まれ故郷ニームに訪ねたとき(1982年秋)、アトリエに入って驚いた。アトリエといっても二つあって、ひとつは、ニームの広場に面した住居のアパートにある、小さなアトリエで、ここには、牛の骨や角、木の枝、流木、鉄片、鉄の輪、石などをカーテンの飾り紐や縄や紐をくくりつけたオブジェがいたるところに吊るしてあった。ちょうど、パリのポンピドー・センターで、1966年から81年におよぶ大回顧展を終えたところで、しばらく絵をやめて、この種のオブジェを作りつづけていると、作家は語った。絵の小さな切れ端をオブジェと一緒に吊るしてあるものもある。ヴィアラは、ドズーズ、パンスマン、セトウールらと、〝シューポール/シュルファス〟の運動を起こしていた60年代末から70年代はじめ頃も、結び目に色を塗った紐や大きな網を吊るした作品を作っているが、その頃の試みは、カンヴァスが繊維で出来た布という支持体（シューポール）であるという意識が反映したもので、その繊維性ともいうべきものを拡大して見せたものだった。この観念的な志向に比べると、最近のオブジェは、もっと即物的というか、布と紐と木の枝がものとして絡みあい、なじみ合っているように見えた。

驚いたのは、もうひとつのアトリエの方である。ニームで若い作家たちのアトリエをいくつか訪ねた後に、車で父親の故郷オーベイ近くのエーグ＝ヴィヴにある大きなアトリエまでドライブした。もと葡萄酒の醸造工場だった、体育館ほどに大きい空間で、醸造用の樽や機械がいくつかころがっている。ここには、大きなカンヴァスの作品が山と床に積まれていて、まるで布の工場のようだ。(そういえばジーンズの布地のデニム -denim- という名称は、Serge de Nîmes(セルジュ ド ニーム)《ニーム産のサージ》が英語化したものである)。

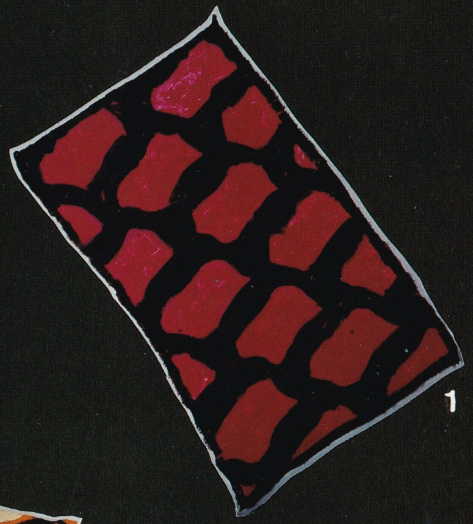
山と積まれた布の作品を、ヴィアラが次々に床にひろげては見せてくれるのが、ある種のパフォーマンスのようで見事だった。同行した横尾忠則が手を貸して、かなり重い布をうんうんいって運んでいたのも愉快だったが、それは、木枠に張ったカンヴァスの作品を次々と壁に立てかけて見せられる、あのよくある経験とはちがって、もっとじかで手ざわりのある光景だった。布といっても、旧作が薄手の白い布を使っていたのにたいして、近作は、テント地やカーテンやタピスリーやパラソルや敷物など、既成の厚手の布を使っており、それが、床にどさっと拠り投げられ、ほこりが立ち、ひろげられるのを百回近く見ただろうか。ヴィアラが、絵画を、断ちきられた聖域というべきイリュージョンの場から、裏も表もある触覚的な布という物に、沈み込ませ、転位させたことが、このパフォーマンスの中に、いきいきと見えてきたのである。

布には、例のパレット型が、くりかえされ、じつにさまざまなヴァリエーションの色で塗られている。タピスリーなどの模様がそのまま残ったものもあれば、パレット型を生地のまま、残して、まわりを塗ったものもある。筆触は、以前よりも豪放となり、それが分厚い布の粗々しさと重なって、かなり粗暴で開放的な作品が多い。

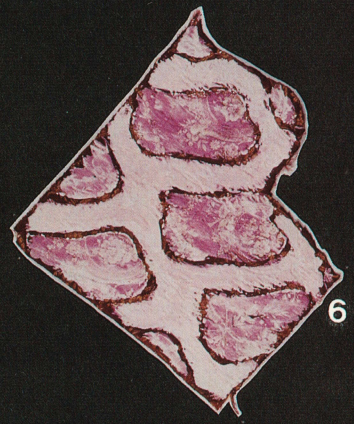
ヴィアラは、じつに熱心に、休まずに、布を運び、ひろげ、たたむことを繰返しながら、息もきらさずに、いろいろなことを語ってくれた。一日に一枚ぐらいは仕上げるらしく、描き出すと、出来るだけ考えないで素早く描くという。そして、既成の布の、それぞれにちがった模様や厚みや触感や物性が、パレット型をくりかえすというきめられたアクションに、その度にちがった抵抗を与え、それが色彩や配置の向きやパターン間の距離を自然に決定する、というのである。そこには、同じ単位を次々と繰り返すミニマル・アートと、床にカンヴァスをひろげて身体ごと入って描くアクション・ペインティングが、70年代の南仏の画家の観念性と身体性の結合という形で、独特に同化されていた。いや、南仏の原始遺跡ガルガスの洞穴にある、原始人の手の押痕に打たれたのが、この押印絵画のひとつの出発点になったというのであってみれば、そこには、同じパターンと繰返すという装飾の原理が、原始の身振りをともなって、現代絵画の領域で恢復されている、と考えた方が、より自然だろうか。何百枚という布の作品が荒々しく積まれてあるのを見ながら、ぼくは、ヴィアラが、世界中の表面あるものに、永遠にパレット型を押しつづけてゆく様を想像し、かれにとって、作品とは、その切れ端の部分にしかすぎないのだろう、と思った。いや、この身振りの洗札を与えられることによって、布が、世界の表面が、絵画となることによって、立ち上り、生き返って、見えてくるのである。

ヴィアラが、自分の作品を「仕事のイマージェ(l'image du travail)」だ、と言う意味も、ニームのアトリエで、あらためて分ったような気がした。そこには「仕事」の見えない全過程が、潜在的に想像域(イマージュ)として浸みこんでいるのである。この言葉を作者は、ある対談でこう説明している。「絵画とは、それを支えている空間の要約(レジュメ)であり、それがひき起こした身振りの、仕事の、それを囲む空間の、じっさいの物理的な状況の、すべての要約なのです。これらすべては、きわめて短い瞬間に強烈にまぜ合わされ、その結果、作品が存在します。これらすべては、そこでは、ひとつの眼差しの、ひとつの記憶の時間であり、ほとんど、ある反射の時間ですが、そこには、すれすれの距離がある。……無数の眼差しが、これらすべてが立ち上るときに、作品を生み出してゆくのです」。

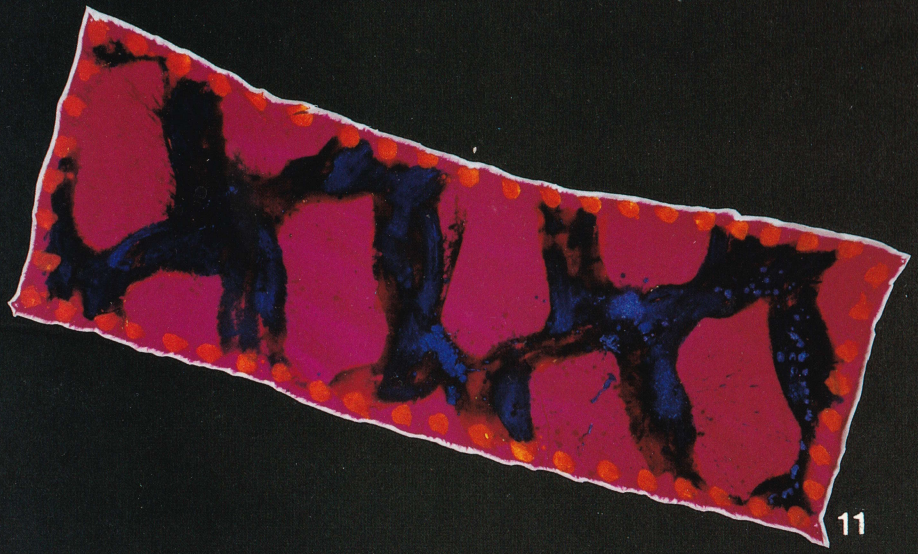
8


1

14


6

3

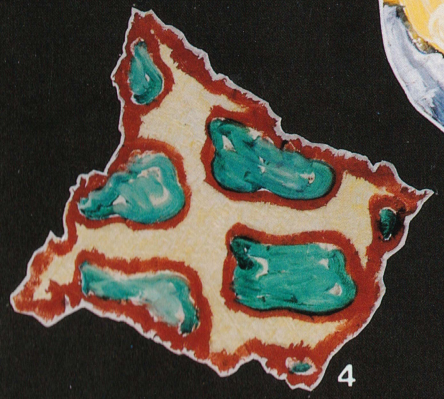

11

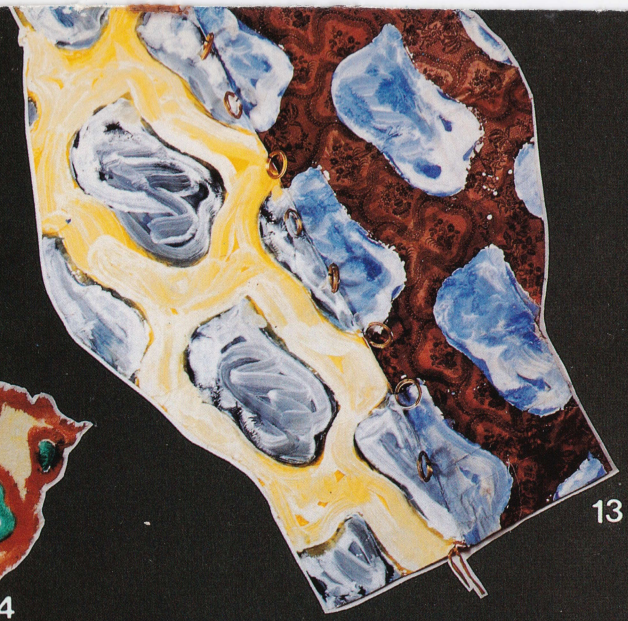
2

9

10

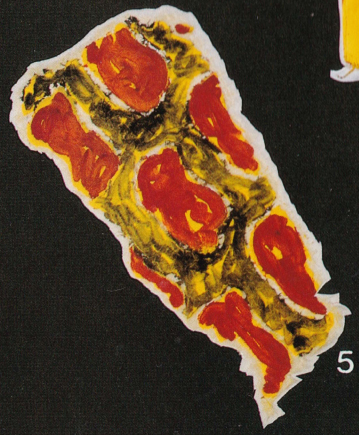
15


4


13

12

7


5

1. 1983 108×170
2. 1983 51×40
3. 1983 133×93
4. 1983 107×84
5. 1983 190×80
6. 1983 89×92
7. 1983 180×80
8. 1983 40×35
9. 1983 40×30
10. 1983 40×35
11. 1983 60×175
12. 1982 40×82
13. 1982 188×120
14. 1983 112×102
15. 1983 180×110

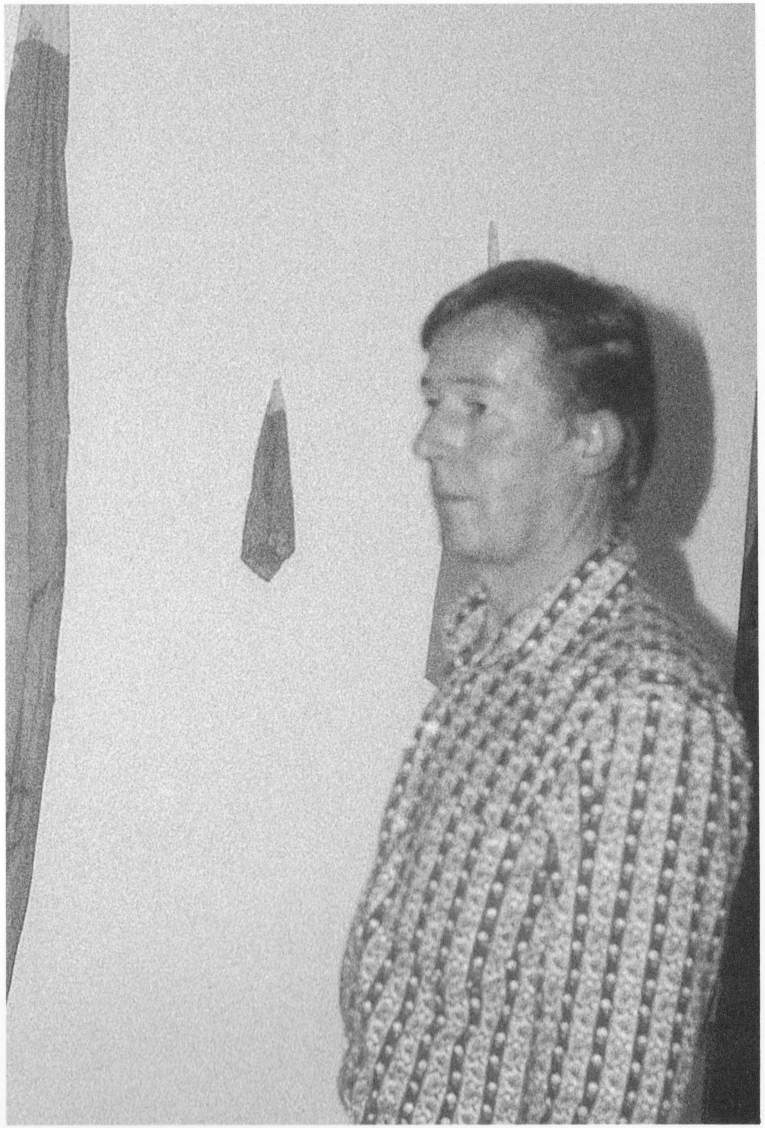


PHOTO by YOSHIAKI TŌNO

個　展

1966　ギャラリーA（ニース）。
1968　ギャラリー・ジャン・フルニエ（パリ）。セレ現代美術館（フランス・セレ）。
1971　ギャラリー・ジャン・フルニエ。
1973　ギャラリー・ジャン・フルニエ。ギャラリー・ダニエル・タンプロン（ミラノ）。
1974　サンテチェーヌ博物館（フランス・サンテチェーヌ）。ギャラリー・デルタ（ブリュッセル）。マラバールとギュネゴンド（ニース）。
1975　ギャラリー・ジャン・フルニエ。
1976　ピエール・マチス・ギャラリー（ニューヨーク）。パレデ・ボザール（ブリュッセル）。ギャラリーA16（フランス・ペルピニャン）。
1977　ギャラリー・ジャン・フルニエ。ギャラリーC.M.（フランス・サンテチェーヌ）。ギャラリー・サンギーヌ（フランス・コリウル）。
1978　ギャラリー・アルタ（ジュネーブ）。文化会館（オルレアン）。セナンク芸術国際センター（フランス・ゴールド）。ギャラリー・アタノール（マルセイユ）。「クロード・ヴィアラ、痕跡」芸術・歴史美術館（フランス・シャンベリ）。
1979　ギャラリー・ワンゼル（ハンブルク）。
1980　C.A.P.C.（現代芸術センター）（ボルドー）。ニュー・ギャラリー（フランス・エクスラシャペル）。
ギャラリー・ジャン・フルニエ。
1981　ギャラリー・アトリエ（ニース）。鎌倉画廊（東京）。エース・ギャラリー（カリホルニア）。エース・ギャラリー（バンクーバー）。
1982　ギャラリー・ウェンツェル（ケルン）。レオ・カステリ（ニューヨーク）。ポンピドーセンター（パリ）。ボガール美術館（モントリオール）。
1983　市立美術館（デュッセルドルフ）。ウオン・ギャラリー（ソウル）。

グループ展

1966　「インパクト」セレ美術館（セレ）。
1969　「シグマ」（ボルド）。
第6回パリ・ビエンナーレ（パリ）。
「現代絵画とは」ルアーブル美術館（ルアーブル）。
1970　「シュポール・シュルファス」パリ近代美術館（パリ）。
1971　「シュポール・シュルファス」大学都市テアトル（パリ、ニース）。
「夏の制作」ギャラリー・ジャン・フルニエ（パリ）。
第7回パリ・ビエンナーレ（パリ）。
1972　「フランス現代美術12年」グラン・パレ（パリ）。
「アムステルダム、デュッセルドルフ、パリ」グッゲンハイム美術館（ニューヨーク）。
1973　「観念的レアリテ・感覚的レアリテ」サンテチェーヌ博物館（サンテチェーヌ）。
「差異の視覚」現代芸術センター（C.A.P.C.）（ボルド）。
1974　「フォシェー、アンタイ、ルアン、ヴィアラ」ピエルマチス・ギャラリー（ニューヨーク）。
「フランスの新しい絵画、実践と理論」サンテチェーヌ博物館（サンテチェーヌ）。
1975　「12×1」ヨーロパリア'75 パレ・デ・ボザール（ブリュッセル）。
1977　「ニース（派）に関して」ポンピドー芸術文化センター（パリ）。
「芸術家／職人？」アール・デ・コラティーフ美術館（パリ）。
1978　時代の証言―パリ・ビエンナーレ'59―'73　西武美術館（東京）。
「空間／自然」C.A.P.C.（ボルド）。
1980　「新野獣派」ニューギャラリー（エクスラシャペル）。
ベニス・ビエンナーレ'80（ベニス）。
1981　「バロック81」パリ近代美術館。
1983　サンパウロ・ビエンナーレ。

クロード・ヴィアラ展カタログ
発行日　1984年4月16日
発行者　中村路子
写　真　J. HYDE
製　作　鎌倉画廊

コンテンポラリーアート
鎌倉画廊
中央区銀座7-10-8　平方ビル1F
03－574－8307　（日曜休み）

クロード・ヴィアラ展

PART I　4月16日－25日
PART II　4月26日－5月4日